

春燈

2019 April

4月号



主宰の句

安立公彦

寒明けの机上嵩なす古書俳書

紺青のみ空や凜と梅の花

片町を彩りゐるや春の雪

音もなく降り積むあはれ春の雪

茂吉忌や山容とはにみだれなし



成瀬櫻桃子の句

瀬祭桑名の浜の常夜灯

「素心以後」(昭和六十年〜平成七年)

三重県桑名市に「船津屋」という割烹旅館がある。泉鏡花の「花行燈」の舞台として知られ、久保田万太郎が戯曲化した時此処を訪れへかはをそに火をぬすまれてあけやすきゝの句を残した。句碑は、船津屋を収り巻く板塀を、箱形に刳り抜いた中に立てられている。浜には大鳥居が建ち、近くに常夜灯と鐘楼が残され、東海道唯一の海路の「七里の渡し」として知られ賑わっている。

上野進

成瀬櫻桃子の句

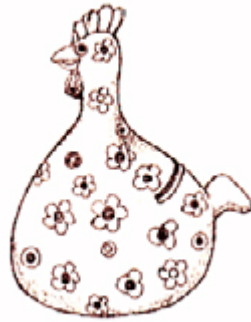
恋文は短きがよしシクラメン

『風色』昭和四十八年

「俳句は点 短歌は線である」と聞いた事がある。「恋文の句」はどうか。この句は先生四十三歳の時の作品。先生五十歳の時に、〈愛は苦のシクラメンの花ねぢれ咲き〉がある。七年の間があるが、両句には結び付きがあるように読み取れる。「恋文」と「ねぢれ咲き」の間には、先生の思いの成行きが感じられ、苦しい。点は線となり、シクラメンが想像を広げる。

永井 恵子

燈下集



○ 小山 繁子

未来へと続くこの道初明り

熱の子に母の膝あり寒林檎

春隣町の医院の大時計

臘梅や効きははじめたる粉葉

待春の神鈴しかと鳴らしけり

○ 小島 昭夫

しみじみと賀状百通百の顔

平成のをはる歌会始かな

蒼天や越後の吹雪思ひ遣る

大根煮る匂ひ漏るるや銀座路地

水仙を手前に富士の雄姿かな

○ 渡 辺 若 菜

亡夫の齡越えて幾年松飾

卒寿とて皺もめでたき初笑

マフラーに愛を編み込む指美しき

仮住みの窓辺明るき福寿草

なまはげになりきる男鹿の男ぶり

○ 西 岡 啓 子

天上の母の励まし冬の虹

母のかほ母のこゑする日向ぼこ

冬深しなにかにつけて母思ひ

神木の新旧そろひ春隣

あらはるる師の匂二月の暦かな

○ 中村紀美子

水垢離の水ほとばしる淑気かな

松過の昼の熱盛ひとり膳

たれかれの笑みのこぼるる福寿草

冬薔薇に女の健気見たりけり

丸窓はをみな座敷春小袖

○ 浅木ノエ

初鳩や身のほど知らぬ夢育て

悴みて耳順のみくじ結びけり

初句会触れむばかりに肩並べ

石州や紙に漉きこむ野辺の草

漉く紙に雀色時せまりくる

○ 懸林喜代次

注連飾る爺の愛車の軽トラに

熱爛や句会の後の置酒款語

万太郎論たけなは湯豆腐煮くづれる

反芻の牛の白息つづきけり

寒波来や胸はだけたる空也像

○ 豊谷ゆき江

いささかの眉ととのへて初鏡

父の背の語らぬ本音切山椒

朝からの寒ぎの虫や根深汁

抜け道の通行禁止空つ風

またしても通過電車や寒の月

○ 後藤眞由業

松籟に乗り来るこゑや初日影

初日影彼の地の戦止み居るや

凍滝の内に轟く勢かな

初芝居鼯鼠役者のちと太る

凍蠅に日矢のカンフル効き始む

○ 川崎真樹子

重き荷のごと列島の背に雪

百歳の忘れ上手や福寿草

人間に入口出口寒九の水

寒月やそこより空の裂けさうな

春を待つ遅延電車を待つやうに

○ 木村 梨花

裏木戸の不協和音や空つ風

埋火や今更話すことでなし

糶初め通り符牒の指二本

生みたてとありて売切れ寒卵

通りぬけ御免とありて梅香る

○ 溝越 教子

外つ国の人に教はる独楽廻し (日本民家園)

グラウンドに子らの喚声どんど焼

目を合はずたびに笑ふ子冬すみれ

夫逝きしよりの耳鳴り寒雀

通したき意地も失せけり寒椿

○ 齋藤 晴夫

学ぶこと増えて楽しき大旦

初日影今北斎の桜富士

若水や上水の味ありがたし

からつきし下手な賀状のそれも良し

面影のいよよ身近に寒供養 (母の遠忌)

○ 坂入 妙香

禅寺の閉ざされし門寒椿

寒夕焼染まる宮益坂下り

母さんの帰り待つ子や冬の月

人は背に暗きを背負ふ焚火かな

冬の夜や言葉激しき詩を綴る

○ 河崎 國代

心性を炙り出したる冬満月 (スーパーマン)

決断をうながされたり虎落笛

障害の重ぬる加療雪中花

着ぶくれて風に抗ふ八起の訓

凡ミスの続くきさらぎ口への字

○ 上野 進

一山をご神体とし松飾る

若草山焼いて薬師寺塔頭

軒下の檻に猪飼ふ峠茶屋

木枯の尾鰭のごとき風と雨

老人といふ抜け殻にも霜夜

余言

安立公彦

竹一幹さささる節や寒の内

鈴木 直充

「寒の内」は周知の通り「寒の入」から「寒明」までの約二十日間を言う。寒さの最も厳しい時期である。

この句、その寒さの中、すつくと立つ竹の姿を詠んでいる。多くの木本の中で、竹ほどその姿の爽やかな感じを持つものは無い。諺にも「竹を割ったような」とある。

その竹を支えるのが「節」である。若し孟宗竹に節が無いとしたら不気味さの上もない。「さささる節」が善く効いている。それは同時に人世にも例えられよう。

元旦や施設の窓に仰ぐ富士

吉澤恵美子

作者は先般施設に転居した。施設を利用して居る人は他にも居ると聞く。住む家が変わると、日常の何彼につけ勝手が異なる。そういう慌しさの中に年も過ぎた。

元日の朝、窓を開けると、晴れ渡る空に富士がまさに霊峰の姿を見せている。その富士山を仰ぐ作者の思いは深か

ろう。「施設の窓に仰ぐ富士」には、書き切れない程の思いが込められている。それと共に、「富士」という言葉は、この句を見る私たちの視界をも広くする。

蹠に夕影重き浮寝鳥

卜部 黎子

「浮寝鳥」は、鴨、鴛、鴛鴦、雁、白鳥など、水に浮かぶ鳥の総称。万葉集にも登場する日本を代表する水鳥だ。「日本大歳時記」には、詳細な解説が付いている。

「蹠」は「水掻き」。水鳥の泳ぎに不可欠のもの。今、その蹠に冬の夕日が差している。浅瀬に佇む水鳥だろう。「夕影重き」に浮寝鳥の孤影が浮かぶ。作者の視線は、その浮寝鳥を優しく包み込む。

女正月素顔のままに暮れにけり

三宅 文子

「女正月」は正月十五日。歳時記の解説で飯田龍太は、「暮れから正月にかけて忙しなかった女性が、この辺りでひと息つく日」と書いている。女正月に相応しい解説だ。

この句、「素顔のままに暮れにけり」が、如何にもこの解説を踏んでいる。歳末から正月にかけて女性の慌しさは今も同じだ。「素顔のままに」に、作者の日常が浮かんで来る。平凡な表現のようで正鵠を得た中七である。

堂塔の屋根の反り合ふ淑気かな

中野さき江

「堂塔」は文字通り寺院の堂や塔。堂塔伽藍は寺院の建物の総称。この句、奈良の景と思われる。「屋根の反り合ふ」に、寺院の堂塔の景が浮かんで来る。

作者は今、そういう古都を歩きながら、代々の歴史を継いで来た大和の風景に見入るのだ。どの道も初春の気に満ちている。思わず「淑気」の言葉が浮かぶ。この句、古都の淑気が自然のさまに詠まれている。

鳥総松晩学の日々動き出す

小泉 三枝

「鳥総松」は、新年に飾った門松を取った跡の穴に、その松の梢を立てておくもの。今は余り見ないが、昔はこういう景をよく見たものだ。

この句「晩学の日々動き出す」が、文句無しに善い。「晩学」に年齢の制約は無い。動き出した晩学の日々の中、作者は急ぐことなく、その晩学に専念するのだ。それは恰も、門松を抜いた跡に差す松の梢のように、確実で歪みのない信念と言えよう。大成を祈るのみ。

出格子の木目のやつれ日脚伸ぶ

久保 久子

古い街道の道筋を見るような句だ。今もこういう旧街道

に残る歴史のある建家は在るのだろう。

「出格子」は、窓の外に張り出した格子。元より木製。その出格子の、「木目のやつれ」がみごとだ。景が目前に浮かぶ。結句を「日脚伸ぶ」としたのも、木目のやつれを受けて動かない。惜しむらくは、こういう景も何時か失せてしまうことだ。己むない事とは言え残念だ。

未来へと続くこの道初明り

小山 繁子

言葉の取合せが善い。「未来へと続く」と「この道」、それを受けて「初明り」は動かない。「この道」の解釈は様ざまだが、例えば「俳句」とすると、私たちにとっては同慶の至りだ。しかしこの句の「この道」にはもっと広い意味があるのではないか。それは個人々の解釈を越えた、「この国」の未来という思いではなからうか。

天上の母の励まし冬の虹

西岡 啓子

作者の母は昨年の年の瀬に逝去。喪中の正月は悲しみもひとしおだろう。しかしこの句は前向きだ。「天上の母の励まし」には、亡き母への深い愛情と、生前の母の物事に動じない姿勢が感じられる。「冬の虹」との取合せも善い。この季語はなかなか使いこなせないが、この句の場合、その「冬の虹」が、上五中七をみごとに受けている。

当月集

安立 公彦選



○ 近藤 真啓

おほかたの星は名持たず冬銀河

畢生の一番勝負独楽回す

参道の灯油ストーブ昭和の香

荒行を見舞ふ檀家や寒紅梅

寺町は吾がふるさとや春兆す

○ 横山 さくら

グランドの影短くなりて春近し

良き便り眺むるを待ち梅八分

突いて出る噂話や水温む

約束をそつと啖く花の屋

山笑ふ紐しめなほす登山靴

○ 田中 嘉信

朝日差す鳥居高々初鴈

寒梅の紅き蕾やお濠端

あかときの街の静寂の淑気かな

丸まつて耳立つる猫冬日和

初富士や妻の手取りて五十年

○ 中澤 弘

臘梅のほのと香るや池の端

冬日さす狭庭の無音くつろげり

気のつけば猫の差し足枇杷の花

久方の句作に疲れ豆を打つ

節分や夜店でしばし豆鉄砲

○ 佐藤 玲子

お元日明けの明星凜として

片言も妊婦も揃ふお元日

初暦嫁も娘も還暦に

一族に亥年が四人明の春

三ヶ日の分まで大川の土手歩こうか

春燈の句

安立 公彦選

幼子の手のぬくもりや雪催

東京 小林 紫乃

露味噌の朝の一菜母の味

どんどの火折鶴天にとび立てよ

東京 村上 國枝

真つ直ぐの果はどこまで枯野徑

遅しき倒木の根や春隣

京都 村上 國枝

山茶花や人も訪はぬに散り急ぎ

まんさくの明かりほつほつ湖の風

東京 小林 文良

七種粥野原の青さそのままに

寂光の香や切岸の水仙花

東京 小林 文良

独り居の煮炊きの炎暮早し

倚りかかる柱の艶や初明り

東京 小林 文良

ヒーターの微かなる音夜の静寂

富士仰ぎみな立ち尽くす初景色

東京 小林 文良

筋トレと思へば床し雪を掻く

袖濡らすほどは降らずや寒の雨

千葉 東木 洋子

春寒や屁理屈捏ねの多くなり

朝なごな冬の日の出を見る病者

千葉 東木 洋子

事なべて平成最後や春浅し

もだ深くはらから来る冬帽子

千葉 東木 洋子

初詣素足に在す菩薩像

着ぶくれて詩囊もつとも乾きをり

千葉 東木 洋子

星の名を指しつつ帰る年賀客

鏡中に母似の吾や木の葉髪

栃木 渡邊 清央

眩しみつ四方拝する老い二人

寒月光名もなき城の闇深み

栃木 渡邊 清央

残り布集め思案の初仕事

草叢がいのちの砦冬の蝶

栃木 渡邊 清央

友の訃や銀杏黄葉の散りしきり

ささやかな背戸にふくよか路の臺

栃木 渡邊 清央

デパートの裏の質屋や一葉忌

東京 遠藤 レイ

